

下京で池野旬京大名誉教授が講演



タンザニアの農村の水問題について池野さんの講演に耳を傾ける参加者ら(京都市下京区・放送大学京都学習センター)

タンザニアの都市近郊農村の水問題について学ぶ講演会が、放送大学京都学習センター(京都市下京区西洞院通塩小路下ル)であった。池野旬京大名

タンザニアの水問題深刻

誉教授(農村社会学)が「変わりゆくアフリカ農村」と題し、乾期が1年の半分を占める現地の暮らしと水利の在り方を考察した。

1年の半分乾期 「資源巡る競合、より激化」

池野さんはタンザニア・キリマンジャロ州のムワンガを訪れ、農村の社会経済の変容などを研究してきた。

講演で池野さんは、1980年代から同国でコーヒーの生産量が激減し、代わりにバナナなどを生産する農村が増えたため、かんがい用水が不足するようになったと解説。また、子どもの増加に伴って寄宿制の学校施設が急増するなどし、経済振興とともに水を巡る問題が深刻化してきたと述べた。

さらに乾期になると水道は3〜4カ月にわたって断水し、水質も濁ってくるため、住民は料金の支払いを拒否し、自主水道事業を立ち上げるなどして生活を守ってきたと説明。「水は死活問題で資源を巡る競合関係は今後、より広域的に激化するだろう」と指摘した。

放送大学の第1回公開講演会で、8月23日に開かれた。

(鷹堀朱里)